

弥谷寺蔵本「胎蔵念誦次第」のフリガナと声点の関係について

森 孝宏*

On the Relationship of Hurigana with “Syo” Points (Accent Marks) Found in ‘Taizonenjyusidai,’ a Buddhist Scripture Owned by Iyadani Temple

Takahiro MORI

Synopsis

This paper describes an analysis of the relationship of hurigana with “syo” points attached to ‘Taizonenjyusidai,’ a Buddhist Scripture owned by Iyadani Temple (Mitoyo City, Kagawa Prefecture). The analysis shows that “syo” points are selected on a different basis from that of Chinese characters. “Syo” points in the above-mentioned scripture respond to hurigana for reading Chinese characters, and not to Chinese characters themselves. A theory advocated by Professor Numoto at Hiroshima University asserts that “Jyousyou” points fall on shorts, while kyosyou points fall on longs and diphthongs. To be sure, there is some sign of it, but confusion between these two points is great in the above-mentioned scripture.

1. はじめに

聖教の梵字と音訳漢字には、声点と考えられる「点」を施したのがある。これらの声点と考えられるものの内で、「上声点・去声点」の使い分けについて、沼本氏は、「訓点資料として見た漢文文献の諸相」で、次のように述べている。¹⁾

「悉曇章靈巖寺和尚本歟(東寺 201-20)」「大悉曇章(東寺 201-3)」「悉曇章慈覚大師請来全雅伝本(東寺 201-19)」「悉曇章(東寺 201-17)」と小野僧正仁海自筆の「不空羼明(随心院)」の梵字資料の加点は、ア、四声を区別する。梵語長音を去声、梵語短音を上声で示す。(P14)

沼本氏のこの説に糸口を得て記した拙著²⁾での分析から、弥谷寺蔵本「異尊鈔」では、

梵字に差された朱点のうち、「去声点」は、

長音のフリガナに対応している。これは、梵字の長音とは必ずしも一致していない。同じ梵字でも「短音のフリガナ」には「去声点」を差していない。あくまでも「長音のフリガナ」に対応しているのである。

という結果を得た。梵字と対応する音訳漢字の声点は同質のものと考えられる。しかし、それらの音訳漢字の「点」には、必ずしも「広韻」の「四声」とは一致せぬものも多い。

今回は、拙著²⁾の延長上に、これらの「声点」の内、特別なものとして意識されていたと考えられる「入声点」とそのフリガナを手がかりに、弥谷寺蔵「胎蔵念誦次第」での加点の一つの原則を、探ってみる。

2. 弥谷寺所蔵本「胎蔵念誦次第」奥書

弥谷寺(香川県三豊市三野町)は、真言宗の古刹である。当寺の所蔵する「胎蔵念誦次第」は、一冊の胡蝶装の枳形本であり、奥書に以下の記述が

* 一般教科

ある。

和州添下郡小泉善隣寺常住

御本云

弘長二年三月七日於報恩院

以御本重書写畢

校合畢 金剛仏子俊

永仁四年十二月二廿八日賜醍醐松檜殿御自

筆御本書写畢 求法資最珠

徳治三年六月三日 以御本書写畢

金剛仏子慶圓

實胤

弘長二年(1262), 永仁四年(1296), 徳治三年(1308)の書写の記述には, 書写者の花押がない。これらは, 本書の祖本であろう。實胤の書写年代については, 記述がなく, 本書の書写年代は特定できていない。

3. 弥谷寺蔵本「胎蔵念誦次第」の 声点とフリガナ

本書には, 朱の単点, 朱の双点合わせて2, 854例の声点らしきものが差されている。これらの系統は未詳であるが, 一系統のみではないらしく, また, 差された時期も一度ではないらしく, 点の大きさ, 鮮明度に微妙な差をもっている。何冊かの祖本から校合移点されたものであるらしい。また, 漢字に対して朱筆で振り仮名を施した1, 218例と, 墨筆の振り仮名1例とがある。

これらの「声点, 漢字の声調注記」は, 「広韻」とは必ずしも一致せず, 何か別の原則によって加点したとしか考えられぬ例が数多い。

4. 「入声点」とフリガナの関係

4.1 入声字に「平声点・上声点・去声点」 を差した例

弥谷寺蔵本「胎蔵念誦次第」でも, 「広韻」の入声点は, 他の「平声点・上声点・去声点」とは異なる, 音節の末尾に「-p, -t, -k」を持つ, 特別なものと意識されていたようで³⁾, その使用には特別な意味があったようだ。

しかしながら, 「広韻」では「入声」である字に, 弥谷寺蔵本「胎蔵念誦次第」においては, 他の「平声点・上声点・去声点」を差した例が多数あり, しかも, 入声とは考えられぬフリガナを注してある使用例が認められる。

4.1.1 「瑟」

「瑟」は「広韻」では入声である。

- 1) 鉢^{ハン} 瑟^セ 但^{タン} 羅^ラ 陽^{ヤウ} 瑟^セ 尼^ニ 灑^{シャ}
(35 オ L2)^{注 1}
- 2) 瑟^セ 置^チ 力^リ 尾^ヒ 訖^キ 哩^リ
(32 ウ L3)
- 3) 瑟^セ 置^チ 力^リ 尾^ヒ 訖^キ 哩^リ
(32 ウ L3)
- 4) 底^シ 瑟^セ 担^{タン}
(4 オ L5)
- 5) 地^チ 瑟^セ 囊^{ノウ}
(12 オ L6)
- 6) 縛^{バク} 斯^シ 瑟^セ 栗^リ 金^{キン} 沙^{シャ} 縛^{バク}
(59 オ L5)
- 7) 尾^ビ 瑟^セ 擊^キ 吠^{ヘイ} 娑^サ 縛^{バク} 賀^カ
(66 オ L7)
- 8) 尾^ビ 瑟^セ 擊^キ 助^{シュ} 娑^サ 縛^{バク} 賀^カ
(66 ウ L4)
- 9) 奄^{エン} 阿^ア 瑟^セ
(67 オ L6)
- 10) 捺^ナ 栗^リ 瑟^セ 恥^チ 切^キ 諾^{ダク} 迦^カ
(79 ウ L2)
- 11) 底^シ 瑟^セ 恥^チ 多^タ 助^{シュ} 娑^サ 縛^{バク} 賀^カ
(85 オ L5)
- 12) 能^ネ 瑟^セ 多^タ 羅^ラ
(85 ウ L7)
- 13) 奄^{エン} 地^チ 瑟^セ 多^タ 羅^ラ 瑟^セ 羅^ラ
(54 ウ L6)

1)の「瑟」は, フリガナ「シン」, 平声点である。2), 3)の二例は, 同一字に二種類のフリガナと二種類の声点が差されている。2)と4)~12)の「瑟」はフリガナ「シム」で上声点である。3)と13)の「瑟」は, フリガナ「シチ・シツ」で, 入声点である。

これらは, 入声点でのフリガナと, 平声点・上声点でのフリガナとが異なっている。

4.1.2 「室」

「室」は「広韻」では入声である。

- 14) 地^チ 室^シ 哩^リ 含^{カン} 没^{ボク} 藍^{ラン}
(28 オ L4)
- 15) 奄^{エン} 地^チ 室^シ 哩^リ 輸^{シュ} 魯^ロ 多^タ
(31 ウ L3)
- 16) 奄^{エン} 地^チ 室^シ 哩^リ 輸^{シュ} 魯^ロ 多^タ
(50 ウ L1)
- 17) 昧^{マイ} 室^シ 羅^ラ 摩^{マン} 擊^キ 野^ヤ
(68 ウ L7)
- 18) 薩^{サツ} 縛^{バク} 但^{タン} 他^タ 孺^{ニョ} 多^タ 室^シ 者^{シャ} 地^チ
(4 オ L4)

これも, 「室」に対する, 18)の入声点のフリガナは「シチ」であるのに対して, 14)~17)は上声点でフリガナは「シ」である。

4.1.3 「業」

「業」は「広韻」では入声である。

- 19) 歴^{レキ} 洛^{ラク} 佉^{キヤ} 夜^ヤ 没^{ボク} 業^{ヤク} 含^{カン}
(10 ウ L7)
- 20) 業^{ヤク} 乞^キ 叉^{シャ} 湿^{シツ} 縛^{バク} 羅^ラ 娑^サ 縛^{バク} 賀^カ
(69 オ L3)
- 21) 業^{ヤク} 訖^キ 叉^{シャ} 尾^ヒ 彌^ミ 也^ヤ 達^{ダク} 哩^リ 娑^サ
(69 ウ L1)

- 22) 帝^マ 毘^ヒ 葉^{ヤク} (32オL1)
 23) 怛^マ 麼^マ 羅^ラ 底^チ 毘^ヒ 葉^{ヤク} 娑^サ 縛^{バク} (52オL3)
 24) 阿^ア 奄^{エン} 可^カ 聘^{ケイ} 恥^チ 比^ヒ 葉^{ヤク} 娑^サ 縛^{バク} (53オL4)
 25) 怛^マ 種^{シュ} 底^チ 哩^リ 毘^ヒ 葉^{ヤク} 娑^サ 縛^{バク} 賀^カ (61ウL7)
 26) 怛^マ 羅^ラ 毘^ヒ 葉^{ヤク} 彌^ニ 縛^{バク} (67オL7)
 27) 帝^マ 毘^ヒ 葉^{ヤク} 薩^サ 縛^{バク} 目^メ 契^{ケイ} 毘^ヒ 葉^{ヤク} (88ウL4)

「広韻」で入声である「葉」に対し、フリガナ「ヤク」で入声点を差した例は22)~27)の6例がある。19)~21)の「葉」はフリガナ「ヤ」で上声点を差してある。上声点と入声点とでは、フリガナを異にしている。

4.1.4 「鉢」

「鉢」は「広韻」では入声である。

- 28) 鉢^{ハク} 羅^ラ 訖^キ 哩^リ 底^チ 鉢^{ハク} 哩^リ 輸^{シュ} (12ウL1)
 29) 鉢^{ハク} 哩^リ 布^フ 羅^ラ 野^ヤ (31オL1)
 30) 縛^{バク} 羅^ラ 鉢^{ハク} 羅^ラ 鉢^{ハク} 多^タ (44オL1)
 31) 鉢^{ハク} 羅^ラ (86オL6)
 32) 鉢^{ハク} 哩^リ 體^{タイ} 他^タ 以^イ 反^{ハン} 梅^{メイ} 無^ム 益^{イク} 反^{ハン} 曳^{エイ} (11オL2)
 33) 阿^ア 鉢^{ハク} 羅^ラ 底^チ 娑^サ 謎^{メイ} (11ウL6)
 34) 鉢^{ハク} 羅^ラ 底^チ 尾^ビ 然^{ゼン} (31オL2)
 35) 鉢^{ハク} 羅^ラ 鉢^{ハク} 多^タ (56オL2)
 36) 鉢^{ハク} 羅^ラ 惹^{シヤ} 鉢^{ハク} 多^タ 曳^{エイ} (56オL6)
 37) 鉢^{ハク} 羅^ラ 惹^{シヤ} 鉢^{ハク} 多^タ 曳^{エイ} (56オL7)
 38) 沒^{ハク} 羅^ラ 鉢^{ハク} 羅^ラ (57オL3)
 39) 阿^ア 種^{シュ} 木^ム 日^{ニチ} 南^{ナン} 甘^{カン} 鉢^{ハク} 多^タ 曳^{エイ} 娑^サ 縛^{バク} (64ウL7)
 40) 難^{ナン} 徒^タ 鉢^{ハク} 難^{ナン} 娜^ナ 曳^{エイ} 娑^サ 縛^{バク} 賀^カ (65オL6)
 41) 鉢^{ハク} 哩^リ 體^{タイ} 丁^{テイ} 以^イ 反^{ハン} 吠^{フイ} 曳^{エイ} 娑^サ 縛^{バク} 賀^カ (65ウL6)
 42) 鉢^{ハク} 羅^ラ 戰^{セン} 拏^タ (84ウL5)
 43) 達^{タク} 麼^マ 鉢^{ハク} 羅^ラ 底^チ 瑟^{シム} 恥^チ 多^タ 娑^サ 縛^{バク} 賀^カ (85オL5)
 44) 參^{サム} 鉢^{ハク} 羅^ラ 博^{ハク} 迦^カ (86オL1)
 45) 阿^ア 鉢^{ハク} 羅^ラ 底^チ 丁^{テイ} 以^イ 反^{ハン} 三^{サン} 謎^{メイ} (88オL4)
 46) 鉢^{ハク} 娜^ナ 麼^マ (27オL4)
 47) 鉢^{ハク} 怛^マ 羅^ラ 嗚^ウ 瑟^{シム} 尼^ニ 灑^{シャ} (35オL2)
 48) 鉢^{ハク} 納^{ナク} 麼^マ 阿^ア 賴^{ライ} 野^ヤ (47ウL7)
 49) 鉢^{ハク} 他^タ 悉^{シム} 體^{タイ} (38オL7)
 28)~45)の平声点・上声点の「鉢」のフリガナは、

全てが「ハ」である。それに対し、46)~48)は去声点でフリガナは「ハン」である。49)は入声点で、フリガナは「ハツ」である。

「鉢」の場合、「上声点」は短音に、「去声点」は長音に、という沼本氏の説の延長上にあるものとも言える。

4.1.5 「末」

「末」は「広韻」では入声である。

- 50) 末^マ 隣^{リン} 捺^{タク} 娜^ナ 弭^ミ (77ウL2)
 51) 末^マ 馱^ト 那^ナ (54ウL7)
 50)の「末」の上声点はフリガナ「マ」であるのに対し、51)の入声点のフリガナは「ハツ」である。

4.1.6 「博」

「博」は「広韻」では入声である。

- 52) 奄^{エン} 尾^ビ 魯^ロ 博^{ハク} 乞^キ 叉^{シャ} 那^ナ 迦^カ (64ウL2)
 53) 參^{サム} 鉢^{ハク} 羅^ラ 博^{ハク} 迦^カ (86オL1)
 54) 含^{カム} 欠^{ケム} 縛^{バク} 博^{ハク} 索^{サク} 羅^ラ 吃^{アク} 灑^{シャ} (9オL6)

55) 博^{ハク} 泊^{ハク} 漠^{ハク} 薄^{ハク} (16ウL5)
 52)と53)の「博」の上声点のフリガナは「ハ」であるのに対し、54)と55)の入声点のフリガナは「ハク」である。

4.1.7 「目」

「目」は「広韻」では入声である。

- 56) 那^ナ 目^{ボク} 迦^カ 難^{ナン} 去^ク (24ウL7)
 57) 尾^ビ 目^{ボク} 乞^キ 底^チ (38オL7)
 58) 阿^ア 鼻^ヒ 目^{ボク} 佐^サ (76オL3)
 59) 地^チ 目^{ボク} 乞^キ 底^チ (83オL2)
 60) 尾^ビ 濕^{シツ} 縛^{バク} 目^{ボク} 契^{ケイ} 蔽^{ヒヤク} (9オL5)
 61) 尾^ビ 濕^{シツ} 縛^{バク} 目^{ボク} 契^{ケイ} 蔽^{ヒヤク} (78オL5)
 62) 薩^{サク} 縛^{バク} 目^{ボク} 契^{ケイ} 毘^ヒ 葉^{ヤク} (32オL2)
 63) 帝^マ 毘^ヒ 葉^{ヤク} 薩^サ 縛^{バク} 目^{ボク} 契^{ケイ} 毘^ヒ 葉^{ヤク} (88ウL5)

「目」の56)~59)の上声点のフリガナは「ホ」であるのに対し、60)~63)の入声点のフリガナは「ホク」である。

4.1.8 「諾」

「諾」は「広韻」では入声である。

- 64) 尾^ビ 麼^マ 底^チ 制^{セイ} 諾^{ノク} 迦^カ (42オL3)
 65) 捺^{タク} 栗^リ 瑟^{シム} 恥^チ 石^{シヤク} 諾^{ノク} 迦^カ (79ウL2)
 66) 尾^ビ 孕^ウ 設^{セツ} 底^チ 南^{ナン} 諾^{ノク} (67オL6)
 67) 拏^ナ 惡^ウ 寤^ウ 弱^{ニヤク} 弱^{ニヤク} 諾^{ノク} 莫^{マク} 娑^サ 縛^{バク} (19ウL4)

「諾」の64)と65)は上声点でフリガナは「タ」であるのに対し、67)は入声点でフリガナは「タク」である。66)は入声点であるにも拘わらず、フリガナは「タ」である。既に混乱が始まっているものであろう。

4.1.9 「惹」

「惹」は「広韻」では上声，入声である。

- 68) 布^ホ 惹^{シヤ} 鉢^{ハツ} 羅^{ニ合} 縛^{ニ合} 縛^{ニ合} 縛^{ニ合} (4オL2)
- 69) 多^ホ 本^{ホン} 惹^{ニ合} 惹^{ニ合} 囊^{ニ合} (5オL6)
- 70) 欠^{ケム} 惹^{ニ合} 利^{ケイ} 計^{ケイ} 娑^{ニ合} 賀^{ニ合} (22ウL6)
- 71) 尾^ビ 惹^{ニ合} 野^{ニ合} 吽^{ニ合} 惹^{ニ合} 娑^{ニ合} 賀^{ニ合} (33オL4)
- 72) 施^シ 惹^{ニ合} 尾^{ニ合} 惹^{ニ合} 欲^{ニ合} (35ウL1)
- 73) 尾^ビ 惹^{ニ合} 曳^{ニ合} (50ウL1)
- 74) 鉢^{ハツ} 羅^{ニ合} 惹^{ニ合} 鉢^{ニ合} 多^{ニ合} 曳^{ニ合} (56オL7)
- 75) 畔^{ハン} 惹^{ニ合} 薩^{ニ合} 回^{ニ合} 陀^{ニ合} 野^{ニ合} (27ウL2)
- 76) 尾^ビ 惹^{ニ合} 曳^{ニ合} (31ウL3)
- 77) 羯^{ケツ} 麼^{ニ合} 湿^{ニ合} 惹^{ニ合} 多^{ニ合} 吽^{ニ合} (37オL3)
- 78) 惹^{ニ合} 底^{ニ合} (37ウL7)
- 79) 尾^ビ 娑^{ニ合} 栗^{ニ合} 惹^{ニ合} (49オL1)
- 80) 惹^{ニ合} 者^{ニ合} 陽^{ニ合} 姪^{ニ合} 難^{ニ合} 娑^{ニ合} 賀^{ニ合} (52ウL5)
- 81) 尾^ビ 羅^{ニ合} 惹^{ニ合} 達^{ニ合} 麼^{ニ合} (87ウL3)
- 82) 阿^ア 單^{ニ合} 惹^{ニ合} 野^{ニ合} (87ウL7)
- 83) 羅^{ニ合} 羅^{ニ合} 々^{ニ合} 吽^{ニ合} 惹^{ニ合} 娑^{ニ合} 賀^{ニ合} (25ウL6)
- 84) 尾^ビ 惹^{ニ合} 野^{ニ合} 吽^{ニ合} 惹^{ニ合} 娑^{ニ合} 賀^{ニ合} (33オL4)

「惹」は「広韻」では上声・入声であるが、68)～82)の平声点・上声点のフリガナは「シヤ」、83)～84)の入声点のフリガナは「シヤク」である。

4.1.10 「縛」

「広韻」での「縛」は、去声，入声である。

- 85) 益^{ニ合} 係^{ニ合} 縛^{ニ合} 羅^{ニ合} 娜^{ニ合} (44オL1)
- 86) 入^{ニ合} 縛^{ニ合} 羅^{ニ合} 摩^{ニ合} 履^{ニ合} 備^{ニ合} (84オL7)
- 87) 怛^{ニ合} 他^{ニ合} 囉^{ニ合} 多^{ニ合} 訶^{ニ合} 縛^{ニ合} (85オL4)
- 88) 縛^{ニ合} 縛^{ニ合} 娑^{ニ合} 縛^{ニ合} 多^{ニ合} 野^{ニ合} (61オL3)
- 89) 縛^{ニ合} 娑^{ニ合} 娑^{ニ合} 囊^{ニ合} (77ウL7)
- 90) 縛^{ニ合} 縛^{ニ合} 娑^{ニ合} 縛^{ニ合} 多^{ニ合} 野^{ニ合} (61オL2)
- 91) 落^{ニ合} 落^{ニ合} 縛^{ニ合} 入^{ニ合} 釜^{ニ合} (16ウL5)
- 92) 縛^{ニ合} 入^{ニ合} (37オL6)
- 「縛」は「広韻」では去声・入声であるが、85)～89)の平声点・上声点に対するフリガナは「ハ」、90)の去声点に対するフリガナは「ハイ」、91)～92)の入声点に対するフリガナは「ハク」と使い分

けている。これも、「上声点」は短音に、「去声点」は長音に、という沼本氏の説の延長上にあるものとも言える。

4.1.11 「入」

「広韻」では「入」は入声である。

- 93) 入^{ニ合} 縛^{ニ合} 攞^{ニ合} (84ウL6)
- 94) 入^{ニ合} 縛^{ニ合} 攞^{ニ合} 摩^{ニ合} 履^{ニ合} 備^{ニ合} (84オL7)
- 「入」は「広韻」では入声であるが、93)の平声点のフリガナは「シ」であり、94)の入声点のフリガナは「シム」である。

4.1.12 まとめ

以上、「広韻」での入声字に「平声点・上声点・去声点」を差した例を見たが、注目すべきは、入声点を差した場合のフリガナと、平声点～去声点を差した場合のフリガナとは異なっていることである。入声点を差した場合のフリガナは、音節末に「-p, -t, -k」を持つ、特別なものとして意識していたのは間違いない。

それに対し、「平声点，上声点，去声点」は、「入声点」の読みとは異なり、「-p, -t, -k」を除いた読みを表示するためのものと考えられる。

次に、入声点でのフリガナを有する例を拾えないが、「広韻」で入声になっている字に、入声点以外の点を差した例を挙げてみる。

4.1.13 「吃」

「吃」は「広韻」では入声である。

- 95) 作^{ニ合} 吃^{ニ合} 管^{ニ合} 娑^{ニ合} 賀^{ニ合} (82ウL3)
- 「吃」は「広韻」では入声であるが、95)は上声点でフリガナは「キ」である。

4.1.14 「得」

「得」は「広韻」では入声である。

- 96) 薩^{ニ合} 得^{ニ合} 迦^{ニ合} 野^{ニ合} (79ウL1)
- 「得」は「広韻」では入声であるが、96)は上声点でフリガナは「ト」である。

4.1.15 「達」

「達」は「広韻」では入声である。

- 97) 没^{ニ合} 駄^{ニ合} 達^{ニ合} 羅^{ニ合} 尼^{ニ合} (21ウL7)
- 98) 僉^{ニ合} 達^{ニ合} 羅^{ニ合} 尼^{ニ合} (45ウL2)
- 99) 摩^{ニ合} 訶^{ニ合} 羅^{ニ合} 麼^{ニ合} 達^{ニ合} 麼^{ニ合} (52ウL1)
- 100) 建^{ニ合} 達^{ニ合} 羅^{ニ合} 縛^{ニ合} (58オL3)
- 101) 葉^{ニ合} 訖^{ニ合} 又^{ニ合} 尾^{ニ合} 備^{ニ合} 也^{ニ合} 達^{ニ合} 哩^{ニ合} 娑^{ニ合} 賀^{ニ合} (69ウL2)
- 102) 誨^{ニ合} 達^{ニ合} 羅^{ニ合} 吽^{ニ合} (86ウL4)
- 103) 備^{ニ合} 栗^{ニ合} 吠^{ニ合} 達^{ニ合} 備^{ニ合} (29オL4)
- 104) 縛^{ニ合} 羅^{ニ合} 達^{ニ合} 羅^{ニ合} (46ウL4)
- 105) 達^{ニ合} 隣^{ニ合} 達^{ニ合} 隣^{ニ合} (92ウL5)

「達」は「広韻」では入声であるが、(97)~(98)と(100)~(105)の平声点・上声点でのフリガナは「タ」である。99)は平声点であるにも拘わらず、フリガナは「タラ」である。混乱が始まっているものであろう。

4.1.16 「乞」

「乞」は「広韻」では入声である。

- 106) 尾 目 乞 底_{二合}(79ウL3)
- 107) 娑 乞 叉_{二合引}(10オL7)
- 108) 乞 栗_{二合} 怛_{二合} 縛_{二合}(10ウL6)
- 109) 作 乞 言_{二合} 尾 野_{二合} 縛_{二合} 路_{二合引}
迦 野 (34オL2)
- 110) 乞 釜_{二合引} 底(49ウL2)
- 111) 曩 言 藥 乞_{二合}(58オL3)
- 112) 落 乞 糸_{二合} 娑 讖 尼 旗_{二合}
(63ウL3)
- 113) 落 乞 叉_{二合} 細_{二合} 毘 藥_{二合} 娑 縛_{二合}
賀_{二合引} (64オL2)
- 114) 奄 尾 魯 博 乞 叉_{二合} 那 加_{二合}
(64ウL2)
- 115) 藥 乞 叉_{二合} 濕_{二合} 縛_{二合} 羅 娑 縛_{二合} 賀_{二合引}
(69オL3)
- 116) 縛_{二合} 羅 落 乞 叉_{二合} 婿_{二合} 平_{二合}
(88オL7)

「乞」は「広韻」では入声であるが、(106)~(116)の平声点・上声点でのフリガナは「キ」である。

4.1.17 「没」

「没」は「広韻」では入声である。

- 117) 阿 没 栗_{二合} 都 嘔 婆_{二合} 縛_{二合} 娑_{二合}
賀_{二合引} (83ウL3)
 - 118) 娑 没 栗_{二合} 底(22オL1)
- 「没」は「広韻」では入声であるが、(117)~(118)の平声点・上声点でのフリガナは「ホ」である。

4.1.18 「捺」

「捺」は「広韻」では入声である。

- 119) 弩 暮 捺 那(5オL7)
- 120) 戰 種_{二合} 捺 羅_{二合} 野 娑 縛_{二合} 賀_{二合引}
(67オL2)
- 121) 捺 奢_{二合} 縛_{二合} 路_{二合} 温_{二合} 婆_{二合} 吠_{二合}
(73ウL1)
- 122) 捺 奢_{二合} 沫 浪_{二合} (86ウL3)
- 123) 末 隣_{二合} 捺 娜 弭_{二合}(77ウL2)
- 124) 捺 栗_{二合} 瑟 恥 砌_{二合} 諾 迦_{二合}
(79ウL2)
- 125) 捺 月_{二合} 灑 夜_{二合} 旗_{二合}(6ウL1)
- 126) 達 麼 王 冊 捺 羅_{二合} 奢_{二合}(79オL7)

「捺」は「広韻」では入声であるが、(119)~(126)の平声点・上声点でのフリガナは「タ」である。

4.1.19 「濕」

「濕」は「広韻」では入声である。

- 127) 尾 濕_{二合} 縛_{二合} 目 契_{二合} 蔽(9オL5)
 - 128) 奄 摩 係 濕_{二合} 縛_{二合} 羅 野(68オL3)
 - 129) 藥 乞 叉 濕_{二合} 縛_{二合} 羅 娑 縛_{二合}
賀_{二合引} (69オL3)
 - 130) 尾 濕_{二合} 縛_{二合} 目 契_{二合} 蔽_{二合}(78オL5)
- 127)~(129)は、平声点で、フリガナは「シ・シム」である。130)は入声点であるが、フリガナは128)と同じ「シ」である。130)は、紛れとしか解釈できない。

4.2 平声・上声・去声字に「入声点」を差した例

これまでの例とは逆に、「広韻」では、「平声・上声・去声」字であるのに、「入声点」を差したのものが有り、フリガナも入声的な読み方を示唆している。

4.2.1 「娑」

「娑」は「広韻」では平声である。

- 131) 縛_{二合} 白 魯_{二合} 娜 娑_{二合} 吠(29ウL3)
- 132) 捨 野 薩 担_{二合} 娑 野 娑 担_{二合} 娑 野_{二合}
(32ウL4)
- 133) 參 娑 夕 尾 娑 縛_{二合}(52ウL1)
- 134) 捺 奢_{二合} 縛_{二合} 路_{二合} 温_{二合} 娑_{二合} 吠_{二合}(73ウL1)
- 135) 縛_{二合} 娑 娑 曩(77ウL7)
- 136) 避 娑 羅 三 娑 吠_{二合}(24ウL7)
- 137) 三 娑 吠 娑 縛_{二合} 賀(30ウL3)
- 138) 三 娑 縛_{二合} 娑 縛_{二合} 賀(47ウL4)
- 139) 參 娑 夕 尾 娑 縛_{二合}(52ウL1)
- 140) 三 娑 縛_{二合}(83ウL7)
- 141) 尾 灑 也 參 娑_{二合} 縛_{二合}(86オL2)
- 142) 娑 他_{二合} 娑 野 娑 他_{二合} 波 野_{二合}
(92ウL6)
- 143) 薩 縛_{二合} 娑 縛_{二合} 句_{二合}
(8オL4)
- 144) 娑 縛_{二合} 娑_{二合} 縛_{二合} 悉_{二合} 體_{二合} 多_{二合}
(38ウL6)
- 145) 温 娑_{二合} 縛_{二合}(45オL6)
- 146) 阿 没 栗_{二合} 都 嘔 娑_{二合} 縛_{二合} 娑_{二合}
賀_{二合引} (83ウL4)
- 147) 路 娑_{二合} 縛_{二合} 乞 三 摩_{二合} 多_{二合}
(86オL6)
- 148) 娑_{二合} 種_{二合} 薩_{二合} 縛_{二合} 吃_{二合} 哩_{二合} 捨(33ウL2)
- 149) 娑_{二合} 上急乎(81ウL1)

「婆」は「広韻」では平声であるが、148)~149)の入声点に対するフリガナは「ハク」である。131)~142)の平声点・上声点のフリガナは「ハ・ハム」、143)~147)は去声点でフリガナは「ハム」である。

「婆」も上声点は短音、去声点は長音という沼本氏の説の延長上にあるものと言えるが、131), 134)の平声点、138)~141)は上声点であるにも拘わらず去声点と同じ「ハム」のフリガナがある。注目すべきは144)の「ハム」のフリガナの内、朱筆「ハ」に墨筆「ム」を書き加えてあることである。去声点は長音という意識からの書き加えであると同時に去声点にも短音のフリガナを注してしまうこともあった時代と考えられる。混乱が始まっているのであろう。

4.2.2 「蔽」

「蔽」は「広韻」では去声である。

- 150) ^{ヒン}蔽 ^{ヒヤク}唱 ^ト多 (41ウL5)
 151) ^ハ奄 ^ハ阿 ^ハ婆 ^ハ薩 ^ハ縛 ^{ヒヤク}蔽 ^{ヒヤク}婆 (53ウL1)
 152) ^{ヒヤク}蔽 ^{ヒヤク}底 ^{ヒヤク}蔽 (84オL3)

「蔽」は「広韻」では去声であるが、151)と152)は入声点を差してあり、フリガナは「ヒヤク」である。平声点を差してある150)はフリガナ「ヒン」を注している。

4.2.3 「但」

「但」は「広韻」では平声、上声、去声である。

- 153) ^{タク}但 ^{タク}説 ^{タク}義 ^{タク}鐸 (16ウL4)
 153)は入声点を差してあり、フリガナ「タク」である。

5. 入声以外での読み分けを示した声点

5.1 「忙」

「忙」は「広韻」では平声である。

- 154) ^マ忙 ^マ履 ^マ入 ^マ婆 ^マ縛 ^マ賀 (27オL5)
 155) ^マ係 ^マ矩 ^マ忙 ^マ哩 ^マ計 (39ウL3)
 156) ^マ係 ^マ係 ^マ矩 ^マ忙 ^マ履 ^マ計 (40オL2)
 157) ^マ阿 ^マ然 ^マ矩 ^マ忙 ^マ縛 ^マ鳩 (40ウL7)
 158) ^マ三 ^マ忙 ^マ參 ^マ麼 ^マ婆 ^マ縛 ^マ賀 (87オL1)
 159) ^マ阿 ^マ三 ^マ忙 ^マ鉢 ^マ多 ^マ達 ^マ摩 ^マ駄 ^マ親 (19ウL7)
 160) ^マ參 ^マ々 ^マ忙 ^マ婆 ^マ泥 (52ウL2)
 161) ^マ曩 ^マ忙 ^マ婆 ^マ縛 ^マ賀 (19オL3)
 162) ^マ忙 ^マ莽 ^マ鷄 ^マ金 ^マ剛 (28ウL4)
 163) ^マ忙 ^マ野 ^マ多 ^マ婆 ^マ縛 (38ウL6)
 154)~158)は、上声点でフリガナ「マ」である

のに対し、161)~163)の去声点ではフリガナ「マウ」である。上声点は短音、去声点は長音という沼本氏の説の延長上にあるものと言えるが、159)~160)では、上声点であるにも拘わらずフリガナ「マウ」であり、使い分けの混乱したものであろう。

5.2 「娑」

- 「娑」は「広韻」では上声である。
 164) ^サ咍 ^サ娑 ^サ頰 ^サ咤 ^サ野 (26オL5)
 165) ^サ阿 ^サ去 ^サ尾 ^サ娑 ^サ麼 ^サ野 (41オL5)
 166) ^サ賀 ^サ娑 ^サ南 (57ウL1)
 167) ^サ落 ^サ乞 ^サ刹 ^サ娑 ^サ識 ^サ尼 ^サ旗 (63ウL4)
 168) ^サ羅 ^サ入 ^サ吃 ^サ察 ^サ娑 (63オL7)
 169) ^サ摩 ^サ駭 ^サ娑 ^サ麼 ^サ羅 ^サ娑 ^サ縛 ^サ賀 (76オL5)
 170) ^サ鉢 ^サ羅 ^サ娑 ^サ勞 ^サ那 ^サ哩 ^サ也 (82ウL7)
 171) ^サ羅 ^サ娑 ^サ羅 ^サ娑 ^サ釜 ^サ羅 (85ウL7)
 172) ^サ娑 ^サ上 ^サ種子 (25ウL4)
 173) ^サ娑 ^サ怖 ^サ咤 ^サ野 (30ウL2)
 174) ^サ尾 ^サ娑 ^サ栗 ^サ惹 ^サ (49オL1)
 175) ^サ薩 ^サ鑊 ^サ娑 ^サ担 (75ウL5)
 176) ^サ縛 ^サ娑 ^サ曩 (77ウL7)
 177) ^サ迦 ^サ娑 ^サ訶 ^サ惹 (79ウL1)
 178) ^サ娑 ^サ他 ^サ婆 ^サ野 (92ウL6)
 179) ^サ娑 ^サ没 ^サ栗 ^サ底 (22オL1)
 180) ^サ鉢 ^サ他 ^サ悉 ^サ體 ^サ多 ^サ娑 ^サ麼 (38ウL1)
 181) ^サ娑 ^サ麼 ^サ羅 ^サ娑 ^サ麼 ^サ羅 (39ウL4)
 182) ^サ娑 ^サ麼 ^サ栗 ^サ底 (86ウL7)

164), 166)~168), 171)の平声点はフリガナ「ソ・サ」、165), 169)~170)のフリガナは「サム・シヤ」であり、172)~178)の上声点のフリガナは「サ・ソ」、179)~182)は去声点でフリガナは「サム」である。上声点は短音、去声点は長音という沼本氏の説の延長上にあるものと言える。平声点のフリガナ「サム・シヤ」は混乱であらう。

6. 四声点とも読みを表示したとも考えられない使用例

6.1 本文右側・左側に集中した例

15ウ~16オには、酷似した一連の章句が並んでいる。

- 曩 莫 三 曼 多 没 駄 ^南南 ^阿阿 ^迦迦 ^佉佉
 識 伽 ^左左 ^石石 ^差差 ^惹惹 ^鄴鄴 ^咤咤 ^咤咤 ^擊擊 ^茶茶

・多^タ・他^タ・娜^ナ・馱^ト・跋^ハ・頗^ハ・麼^マ・婆^バ・
 野^ヤ・羅^ラ・擻^ラ・縛^バ・捨^セ・灑^サ・娑^サ・賀^カ・吃^キ
 灑^{二合} (15ウL2 ~ 15ウL5)
 曩^ナ・莫^マ・參^{サン}・滿^{マン}・多^タ・沒^マ・馱^ト・南^{ナン}・阿^ア・迦^カ・佉^カ
 識^シ・佉^カ・左^サ・石^シ・差^サ・惹^ケ・鄢^ン・陀^タ・陀^タ・拏^ナ・茶^{チャ}
 ・多^タ・他^タ・娜^ナ・馱^ト・跋^ハ・頗^ハ・麼^マ・婆^バ・
 野^ヤ・羅^ラ・擻^ラ・縛^バ・捨^セ・灑^サ・娑^サ・賀^カ・吃^キ
 灑^{二合} (15ウL7 ~ 16オL3)

この中には、四声点とも、読みを表示したとも考えられない加點例が若干拾える。

183) 陀^タ・陀^タ・拏^ナ・茶^{チャ} (15ウL3)

184) 陀^タ・陀^タ・拏^ナ・茶^{チャ} (16オL1)

「広韻」去 去 平 平

185) 多^タ・他^タ・娜^ナ・馱^ト (15ウL3)

186) 多^タ・他^タ・娜^ナ・馱^ト (16オL2)

「広韻」平 平 上 去

187) 野^ヤ・羅^ラ・擻^ラ・縛^バ・捨^セ (15ウL4)

188) 野^ヤ・羅^ラ・擻^ラ・縛^バ・捨^セ (16オL2)

「広韻」上 平 - 上 上

189) 灑^サ・娑^サ・賀^カ・吃^キ・灑^{二合} (15ウL4)

190) 灑^サ・娑^サ・賀^カ・吃^キ・灑^{二合} (16オL2)

「広韻」上 上 去 入 上

これらは、「広韻」とは必ずしも一致しない。また、フリガナによる読み分けとも考えられない。これらは、四声の原則に則ったものでもなく、読みを注したものでもない。183)・185)・187)および、184)・186)・188)はそれぞれ一連の章句であり、それぞれまとまって、本文の左側と右側に加點してある。これは、加點時期を異にしたものであろう。その時期には、「声点」の本来の意味を理解できなくなっていたものであろう。一連の章句であるが、全てが本文の右側に加點してある訳ではなく、190)のように、一部、本文の左に加點した部分が混在している。184),186),188)と190)は、加點時期が異なったものであろうか。

6.2 紛れと考えられる例

[広韻]では入声以外のもので、しかも入声的な読みでないにも拘わらず、入声点を有する例がわずかながら拾える。これらは、入声を表示したのではなく、何かの紛れと考えるべきであらう。

6.2.1 「阿」

「阿」は「広韻」では平声である。

191) 阿^ア・薩^サ・縛^バ・怛^{タン}・羅^ラ・鉢^{ハツ}・羅^{二合}
 底^{テイ}・訶^カ・諦^{テイ} (71オL4)

192) 阿^ア・含^{カン}・惹^ケ (81オL3)

192)は入声点でフリガナは「アク」である。「入声」は特別な読みという意識を、まだ見て取れるが、191)は去声点でフリガナは「アク」である。191)は、「広韻」では平声字であるにもかかわらず、入声的フリガナを注し、「去声点」まで差してある。191)になると、「入声」は特別な読みという意識が揺らぎ始めているようにも思える。

6.2.2 「温」

「温」は「広韻」では上声である。

193) 醞^{ウン}・温^{ウン}・縛^{二合} (56オL2)

193)の「温」は入声点であるが、フリガナ「シ」は入声的ではない。これは、「湿」の誤記の可能性を疑われる。「湿」ならば「広韻」では入声であるが、「湿」だとしてもフリガナの「シ」は入声的ではない。130)と同じ紛れであらう。

まとめ

弥谷寺蔵「胎蔵念誦次第」では、「広韻」で「入声」である字にも「平声点、上声点、去声点」を差し、入声点の場合とは異なるフリガナを注している。この場合の「平声点、上声点、去声点」は、入声点の読みとは異なる読みを表示するためのものと考えられる。逆に、「広韻」での非入声字に対しても、「入声点」を差して、入声的なフリガナを注してある。

また、上声点と去声点には、沼本氏の「梵語長音を去声、梵語短音を上声で示す」という使い分けの延長上にあると考えられる痕跡を読み取れるが、既に混乱を起こしたと考えられる例もまじっており、四声点の使い分け意識の希薄になった後世のものが混じっていると考えられる。

更に、本文の左側、及び右側にまとめて加點してある例も拾える。これらは、「広韻」の四声の意識からも、長音・短音の表示という意識からも、大きく外れてしまった後世の別基準での加點が混入してしまっているものと考えられる。

参考文献

1) 沼本克明, 「訓点資料として見た漢文文献の諸相 - 陀羅尼部の訓点を手掛かりとして - 」(「日本学・敦厚学・漢文訓読の新展開」), 2005.5.27, 及古書院

²⁾ 森孝宏, 弥谷寺所蔵「異尊鈔」の梵字の声点について(二)(「詫間電波工業高等専門学校研究紀要」第34号), 2006

³⁾ 森孝宏, 弥谷寺蔵本「胎蔵念誦次第」の入声点について(「詫間電波工業高等専門学校研究紀要」第31号), 2003

^{注1} 弥谷寺蔵「胎蔵念誦次第」の筆者撮影の帖数と行数を示す。

^{注2} フリガナ「ハム」の内, 朱筆「ハ」に墨筆「ム」が書き加えられている。